

「テニスより格闘技……そうね、考えてみるわ」

マリコさんの乗り気でない声が電話口から聞こえてきた。起き上がるとわたしは彼女へ電話したのである。小雨の降る嫌な天気で、気温もすっかり下がっている。テニスを始める約束をしたのは、ほんの二週間前のこと。彼女は思いついたように話題を変えて喋り始めた。

「でも、全くこの国はどうなっているのかしら。信じられる、偽のライセンスをもったパイロットがセキュリティを通過しようとしていたのよ。他の四人は航空会社の偽のユニフォームを着こんで、機内に座り込んでいたって話よ。もうちょっとで出発する時になって、取り押さえたんだわ。あんなテロの後で、まだこんなことが起こるなんて……」

彼女もかなり興奮している。マリコさんが話していたのは、昨晚、ケネディとラガーディア両空港で拘置された計九人の不審な人物についてだった。ケネディ空港で拘置された四人は十一日朝、ロサンゼルスに向けて発つユナイテッド航空機に乗り込んだところ、同時多発テロで飛行場が閉鎖されたため、出発できなかった乗客だと申し立てた。スーツケースもチェックインしたままになっていたらしい。ラガーディア空港で取り押さえられた三人のアラブ系も同様、火曜日の航空券を持って現れたという。その他に二人、計九人が拘置されたため、ケネディとラガーディア、ニューアークの三飛行場は昨晚、次のテロを警戒して再び閉鎖された。

「それもあるけど、瓦礫の下で夫が電話してきたって大騒ぎしたあの女性、結局、すべてでたらめだったんですって……全く腹が立つわね。そんな女は殺人未遂罪で刑務所へ行ってもらいたいものだけ」

わたしもすかさずこうまくし立てた。

昨晚、寝る前にピートから聞いた瓦礫の下に生存者がいるという話は、全く嘘だったことが朝になってわかったのである。ニュージャージー州ユニオン・シティに住むスゲル・メヒヤは十三日夜、白衣を着てグリニッチ・ヴィレッジの第六分署を訪ね、夫が瓦礫の下から携帯電話で連絡してきた、と訴えた。夫はWTC一号館の下に九名の人たちと一緒に埋まっているという話だった。メヒヤによると、夫はポート・オーソリテイ（ニューヨークとニュージャージー両州港湾局、WTCを所有）の係官であるといつて、認識番号も述べたという。

警官が彼女をグラウンドゼロへ連れて行くと、メヒヤはパニック状態に陥ったので、警官もすっかり彼女の話信じた。救急隊は彼女の夫がいると思われる辺りを掘り起こした。夜が明ける頃まで数時間、生存者を求め、懸命な捜索作業が続いたという。一方、調査を進めていた捜査官はメヒヤという名前の係官が港湾

局の名簿にないことを発見。認識番号も確認できなかった。スゲル・メヒヤの携帯電話を調べてみると、瓦礫のなかから電話がかかった兆候もなかった。彼女はその場で逮捕されたというが、警察長官ですらあつけに取られ、

「何という人騒がせな女だ！」

とため息をついたという。救急隊にしてみれば、生存者が発見できると思っただろうか。身の裂かれるような気分疲労が倍加したに違いない。こんな非常事態に人の善意をもてあそぶ行いは許せない、と朝からわたしは興奮していたのである。

テレビ・ニュースはまた窃盗でふたりが逮捕されたと報じた。それも閉鎖地域のトレード・センター近くの高級時計店に忍び込み、三千ドル相当の時計を盗んだのである。ひとりは刑務所で働く係官だったというのも、ニューヨーク市警にとってショッキングな事実だった。まだ二十三名の警官が行方不明である。警官たちは昼夜休む暇もなく勤務しているというのに、これもまた許せない人間の性(さが)というべきだろうか。

\*あなたも生き延びたのね

午後になると雨が小降りになったので、今日は閉鎖ラインを越えてみようと思いついた。閉鎖地域は今朝から十四丁目以南でなく、チャンネル・ストリート以南まで下がってきた。初日のバスタ以来、この三日間、ろくなものを食べていない。冷蔵庫の奥に卵があったのでオムレツを作ってから、お米と野菜、缶詰で過ごしてきた。例えば、ガリックライスなどといって聞こえはよいけれど、にんにくの炒めご飯である。そのほか、雑炊や野菜スープなどで「戦時中」を忍んできたのである。朝、体重を計ったら、これ以上痩せてはいけなさと決めている一〇五ポンド（四七・六キロ）を割っていた。栄養のあるものを食べなければならぬ。チャンネル・ストリートを越えれば、大きなスーパーもあるから生鮮食料品が手に入るかもしれない。

ピートが「デイリー・ニューズ」のオフィスへ出かけるというので、一緒に表へ出た。チャンネル・ストリートの検問所では、ハイウェイなどで見かける州警察隊が出入りをチェックしていた。まず、人のよさそうな警官にわが家の電気料金請求書とパスポートを見せ、これから買い物に行つて三十分したら、帰ってくるからよろしくね、とにこやかに微笑んだ。ピートは地下鉄のレキシントン・ラインが動いていると聞いて、地下鉄駅の方へ消えて行つた。

ブロードウェイを歩いてソーホーに入る。ちょうど雨が上がって清々しい気分（さか）に包まれる。クルマの往来もほとんどないし、人通りも少ない。しかし、両側の

店はほとんどがオープンしていた。いつものジーンズ店、パン屋さん、文房具の大型店ステープルズ、コーヒー店、小さなブティックなど、いま、店を開けたような様子である。そんな街並みが変わっていないことにわたしは深い安堵を覚えた。そこには十一日以前と同じ街が、同じように息をしていたのである。雑多ではあるけれど、ちよつと取り澄ましたようなモダンな街。

バレエダンサーのような感じの若い日本人女性がロフトから出てくると、にっこり笑顔を見せた。そう、あなたも生き延びたのね、そんなサインだった。道行く人はみんな晴れ晴れとした顔をして、微笑みを浮かべている。みんな生き延びた。あんなに酷いことがあつても、生き延びたことに感謝しているような、そんな顔つきだった。わたしはこれほど幸福な気分浸ったのは久しぶりのことだった。それまで三日間抑えてきた弦が解き放たれたように、鳥が空に飛び立つように、大きな解放感を味わった。

足取りも軽くブロードウェイを北に向かっているうち、わたしはちよつと先のプリンス・ストリートの角にある高級食料品店「デイン&デルーカ」まで行ってみることにした。もしかしたら、もう開いているかもしれない。

次第に人通りも多くなり、ショッピングバッグを抱えた人も増えてきた。若い日本人観光客までいる。まるで十一日以前と同じ。街は何事もなかったように同じリズムで機能している。そして誰もが笑顔を浮かべ、目が合うと、同じサインを送ってくる。あなたも生き延びたのね。

買った物を済ませると、わたしは大型ニューススタンドへ寄ってみた。新聞ばかりでなく、あらゆる雑誌を揃え、コーヒーやペストリーなども食べさせてくれる専門店だ。とにかく新聞が読みたい。しかし、いつも新聞を置いている棚へ目をやると、そこはからっぽだった。

「新聞は来ていないの」

キャッシュヤーで聞いてみる。アラブ系のお兄さんは残念そうに首を振った。考えるまでもなく、ニューヨークのニューススタンドはほとんどアラブ系が経営しているのだった。わたしははつとして、彼に聞いてみた。

「ご家族もみんな大丈夫ですか」

茶褐色の肌の青年はわたしの言葉がよほど嬉しかったらしい。

「心配してくれて、ほんとうにありがとう。今のところ大丈夫です」

同時多発テロくらい、アラブ系への人種迫害が始まっている。イスラム教徒のモスクには酒瓶を投げたり、爆弾予告の嫌がらせが絶えず、アラブ系住人の家では子供を外に出さないようにしているらしい。彼らこそイスラム原理主義者や急進派から逃れ、自由を求めてアメリカへやってきた人たちではないか。

キャナル・ストリートへ戻ってくると、上空で戦闘機の轟音が耳をつんざくようだった。ワシントンのナショナル大聖堂に歴代の大統領夫妻を集めて開かれた

追悼式典が終わり、ブッシュ大統領が現場視察にやってきたのである。式典では、息子の短いスピーチが終わると、父親はよくやった、とても言うように大統領に手をかけた。二列後ろの席には、髭面のアル・ゴアも参列していた。ゴアは一体どんな気持ちでこの数日を過ごしているのだろうか。

#### \*アフガニスタンの戦場

アパートに戻ると、テレビではブッシュ大統領がグラウンドゼロでメガホン片手に救急隊に声をかけていた。わたしはテレビを消し、仕事に戻ろうと思った。締め切りをまだいくつも抱えているから、今晚はしつかり仕事しなくてはならない。ダイニングテーブルの上は、さつきピートが広げていた紙で散らかっていた。朝からインターネットでアフガニスタンやオサマ・ビンラディン、彼のテロ組織「アルカイダ」のことを調べていたので、プリントアウトされた紙がいたるところに積まれたままだった。

「アフガニスタンというのは、まるで百年前の生活を営んでいるようなところだよ。信じられない不毛の土地だ」

そんなことをぶつぶつ言いながら、コラム用のリサーチをしていたのである。「六十二万五千平方キロメートルというのは一体どんな広さかわかるかい。ベトナムの二倍だよ。何もない不毛の山間地で、いちばん高い山は二万五千フィート、土地の十二パーセントしか耕地がない。南西部の砂漠の年間降雨量はたった九インチ、長引く日照りのうえに木々を燃料用に燃やしているから、土地はどんどん砂漠化している……」

わたしはしばらく耳を澄ました。

「人口の二十五パーセントは餓死寸前、農民は遊動民になって、水と草を探して歩き回っている。電話は二千六百万人の人口に対したった三万二千二百台、国際電話で繋がる国はイランのみ。新聞はタリバンによつてコントロールされ、読み書きできるのはたった三十一・五パーセント。これはえらいところだ！」

それに、アフガニスタンはいまでは世界最大の阿片の生産地だという。国民の平均寿命は四十五・五歳、幼児死亡率は千人につき百六十一人と世界でも最悪のレベル。さらに恐ろしいことに、国内にはペスト、コレラ、赤痢、マラリア、髄膜炎、発疹チフスが蔓延しているという。度重なる戦争で浄水システムは壊され、水洗トイレもなく、都市にはネズミが這いまわっているという。

ピートはさらに続けた。

「ソ連はおよそ六十五万人の兵力をアフガニスタンに投入したが、そのうちのなんと八十八・五六パーセントが病気で何度も入院したというんだ。いちばん多かったのが肝炎だという。戦争の最後の段階になると、ソ連兵は麻薬とアルコール

潰けになって、戦う力も無くしたというからね。これはたいへんな戦争になるよ」わたしはアフガニスタンについて何も知らなかったが、数年前、この国から移ってきた大学教授に会ったことがあった。長身で彫りの深いハンサムな五十代の経済学教授である。何かの話のついでに、故郷へ帰ることがあるのか訊いてみると、彼はとんでもないと言って、こう続けた。

「あそこでは決まった髭を伸ばしてはいけないだけで、刑務所にぶち込まれるのです。わたしはまだ親戚を残していますから、ほんとうに心配です」

あの教授は今頃どうしているだろう。そんなことを考えていると、さつきピートがこんなことを呟いていたのを思い出した。

「アフガン・ゲリラはアメリカが訓練したんだから、皮肉なものだね。こんどの戦争は冷戦の産物でもあるんだ」

#### \*アラブ義勇兵を育てた米国

わたしはピートの言葉が気になって、目の前のインターネット情報を読み始めた。旧ソ連軍がアフガニスタンに侵攻したのは一九七九年十二月二十六日のことだった。ソ連はイスラム・ゲリラと戦うアフガニスタンの共産政権支援に踏み切ったのである。

米国はソ連軍と戦うイスラム・ゲリラを全面的に支援した。レーガン政権下のCIA長官ウイリアム・ケーシーはアラブ義勇兵を募り、彼らに軍事訓練を行い、武器を渡し、ソ連に対抗できる兵士に仕上げると戦場へ送り出した。

こうして生まれたゲリラのひとりがオサマ・ビンラディンだったといえる。彼は実戦に参加する一方、資金を提供し、積極的にアラブ義勇兵を募って、軍事訓練や生活上の支援をした、とある報告は記している。CIAがサウジアラビアの富豪の息子を歓迎したのは当然だったろう。

米国がゲリラ組織に与えた援助は総計三十五億ドルという数字が出ている。さらにスイスのCIA口座を通じてサウジアラビアから送られた資金も膨大なものだった。米国ばかりでなく、英国のSASもゲリラ訓練に当たった。

米国の携帯型対空ミサイル「ステインガー」を手に入れたイスラム・ゲリラは、旧ソ連のヘリコプターや軍用機を次々と撃墜、ソ連は、遂に撤退を余儀なくされた。

一九八八年五月十六日、八年半の戦いは幕を閉じた。ゲリラに残されたのは、ソ連製の武器と米国製のステインガー・ミサイルをはじめとした高性能の武器、さらに大国を撃ち負かしたという強い自信だった。

レーガン政権の副大統領だったジョージ・ブッシュが大統領に就任したのは、翌年一九八九年のこと。同年、オサマ・ビンラディンは祖国サウジアラビアに帰

り着いたという。ほかのゲリラもそれぞれの故郷へ戻っていった。

翌九〇年、イラクがクウェートに侵攻した時、ビンラディンはアフガン帰還ゲリラ兵を再召集して、イラク軍と戦う構えでいた。しかし、サウジアラビア王室は米国の誘い通り多国籍軍の支援を受け入れると決定し、ビンラディンの誇りをずたずたに引き裂いた。

同年八月七日、米軍の第一陣、F15イーグル戦闘機がヴァージニア州ラングレー基地からサウジアラビアに到着。ビンラディンは激昂した。この時、サウジアラビアに駐留する異教徒のアメリカこそ、ビンラディンの「次なる敵」に設定されたのである。彼はCNNのインタビュアー（一九九七年）に答えてこう語っている。

「米軍のサウジアラビア駐留は『聖なる土地』の占領である」

「湾岸戦争」時の高支持率にもかかわらず、ジョージ・ブッシュは九二年の大統領選挙に敗れ、次期大統領は民主党のビル・クリントンに決まった。クリントンにホワイトハウスを引き渡す三日前の一九九三年一月十七日、ブッシュ大統領は、スマート巡航ミサイルでイラクを攻撃している。この日は「湾岸戦争」開始二周年に当たった。バグダッド郊外の核兵器工場を標的にした攻撃だと発表されたが、どれくらい命中したか不明。市民が巻き添えを食ったのは間違いない。

考えてみたら、今年一月二十日、息子ブッシュが大統領宣誓を行うと、二月十六日には米英軍が合計二十四機の爆撃機でイラクの防空施設を空爆している。今年に入ってからイラクは同国の南部と北部に設定された「飛行禁止区域」を偵察する英米軍機に挑発行為を繰り返してきたから、というのが空爆の理由である。息子ブッシュのイラク空爆は、任期終了三日前の父親による空爆の続きのつもりだったのか。あるいは、イラク空爆はブッシュ家の挨拶とでも言うべきものなのだろうか。少なくとも、新しい大統領がサダム・フセインの挑発に簡単に乗ったのは確かである。

\*一票の反対を投じたリー議員

六時半の全米ニュースが始まったのでテレビをつけると、米上院と下院はブッシュ大統領が国際テロへの対抗措置として、武力を行使することを認める決議を相次いで採択したことを報道した。大統領は、最大五万人規模の予備役の召集を開始すると決め、「国家非常事態」を宣言した。インターネットによると、大統領の武力行使に対して、上院は全会一致で採択したが、下院では民主党の女性議員ひとりだけが反対票を投じたという。下院での票数は四二〇対一。反対したのはカリフォルニア州選出のバーバラ・リー議員だが、彼女のことはテレビでも報道されていない。

わたしは六十年前の真珠湾攻撃の直後、フランクリン・ルーズベルト大統領の宣戦布告要請にしたがつて、米上院下院が同じように合同決議案の審議を行ったことを思い出した。早速、『一票の反対ージャネット・ランキンの生涯』（大藏雄之助著・文藝春秋刊）を取り出して読んでみる。上院での点呼投票では、賛成八二、反対〇だったと記されている。下院の審議は上院可決の知らせを受けてから始まった。この時、ラジオが一時間の議会中継をしていたという。議長がアルファベット順に議員の名前を読み上げ、賛成の議員が次々に「イエス」と返事した。

「女なので私は戦場には行けません……」

ジャネット・ランキンはこう答えた。

「……ですから、他人を戦場に送ることは拒否します」

同書によると、彼女はこう発言したが、ランキン発言は議事録からは削除されているという。下院では最終的に、賛成三八八、反対一、欠席四一という結果が出た。

六十年後の今日の決議に反対したバーバラ・リー議員は、反対の理由を次のように述べている。

「誰かが抑制しなければなりません。事態が制御できなくなるのを防ぐために、決議の意味をじっくり考えるべきです」

リー議員の発言は米国でほとんど報じられていない。彼女の言葉に耳を傾ける人も少ない。キャナル・ストリートでは星条旗を掲げるクルマが目についた。わたしは星条旗がこの国のいたるところでたなびくようになると、むず痒くなってくる。星条旗をかざすことによつて愛国心を煽り、まるでインディアンを追いかける騎兵隊のような、単純な闘争心を駆り立てるからだ。しかし、この戦争はそんなに単純明快なものではない。

あれだけの被害を目の当たりにすると、わたしもテロリストを見つけて罰したいと思う。罰するのは当然だと思う。しかし、アフガニスタンへの無差別爆撃で被害を受けるのは、餓死寸前の市民ではないか。米国の空爆で生まれるものは、米国への復讐心を抱く次なるテロリストだけである。あれだけ用意周到に同時多発テロを計画、成功させた犯人グループは、テロ後の計画もしっかり練っているだろう。今頃はもう、計画通り、安全な場所へ移動しているに違いない。

新しい大統領の武力行使を認める決議案に反対したリー議員ほど、勇気ある女性はいない、とわたしは思った。サダム・フセインの挑発に簡単に乗ってしまうような大統領が、武力を好きに使える力を与えられたのである。

「誰かが抑制しなければなりません」

彼女はこう発言した。星条旗の翻るこの米国で、復讐心に燃えたアメリカ人を

抑制できる人物はほかにいるのだろうか。わたしは昼間の解放感もわすれて、再び眠れなくなる思いだった。